

親鸞の「仏弟子」観

小 武 秀 道

親鸞の著『敎行信証』『信巻』の真仏弟子釈に於いて、真假批判を施し、「偽の仏弟子」なる存在を提起せられた趣意を推考するに、内外に対する親鸞の批判精神がそこに窺える。

外には国家権力主義的「奏状の文」を起縁とし、権仮と邪偽なる宗教、更には当時の国家権力と密接な関係にあった律令仏敎に対して「偽」なる仏弟子の存在への批判であり、内には自己の虚偽にして「愛欲の広海」に沈み「名利の太山」に迷惑せる実相を自覚せしめられ、更には、「以三本願嘉号^一為^二己善根^三」と本願を私物化し外道へと墜落して行く自己の発見を、偽なる「仏弟子」と呼ばれる矛盾として自覚された自己批判である。従って親鸞の仏弟子観は「偽」なる仏弟子と、偽なる「仏弟子」の二面性からなる批判精神により成立していると解せられる。

ここで親鸞に於いて真仏弟子釈から、所謂「悲歎の文」への展開をみるに、偽なる「仏弟子」に重点が置かれ、それは偽なるが故に「仏弟子」としての意味を有している。そこで

この偽としての批判精神が、如何に「仏弟子」としての相を成立せしめるかを私論してみたい。

「信巻」三心釈に見られる自己の実相は、三心すべてを他力に帰して論ぜられ、至心釈に於いては、「穢惡汚染にして清浄心無し、虚仮詔偽にして真実心無^一き衆生^一如来の清浄真実心。信樂釈に於いて、「諸有論に沈没し、衆苦輪に繫縛せられて、清浄の信樂無し、法爾として真実の信樂無^一き衆生^一如来の「無碍広大の淨信」。そして欲生釈に於いては、衆生の「真実の回向心なし、清浄の回向心な^一き「大小・凡聖・定散・自力の回向」^一如来の大悲回向心。という両者の、絶対にして対立せることへの自己懺悔であり、悲歎の念に依るものである。この親鸞の自己内観は、言うまでもなく如来の大悲の力用に於いてのみ可能なのであり、それを以て自己の無真実性・仮偽性を平面的ではなく、自己の根底より発見するのである。この真実性無き相對者の徹底的なる自覚（悲歎）は既にしてそこに絶対者の働きを意味している。こ

れを考慮に入れ再び三心積を窺うに如来と衆生の関係は、至心積に、

如来一切苦惱の衆生海を悲憫して不可思議兆載永劫に於いて菩薩の行を行じたまふ。

とあり、また信樂積には、

如来菩薩の行を行じたまふ。……(略)……その心は即ち如来の

大悲なるが故に、必ず報土の正定の因となる。如来苦惱の群生海を悲憫して無碍廣大の淨信を以て諸有海に回施したまえり。

更に、欲生積には、

如来一切苦惱の群生海を矜哀して、菩薩の行を行じたまふ。

と、顕示されている。つまり、如来はその真实性なるが故に、真実の慈悲を以て従如来生するのであり、その限りに於いて如来の真实性は永劫修行であり、それは大悲の活動態に外ならない。これは至心積に於いて真実心を果位の如来の語でなく、因位の法蔵菩薩の修行を以て表されている点より窺える。思うに衆生の三心は如来因位の願心より成就するものであるから信樂積・欲生積にも同様に表されている。

この法蔵菩薩の修行は『入出二門偈頌』に於いて五念門であると称せられている。本来五念門は天親により願生者の修すべき三業二利の行業であるべきはずのものが、ここ親鸞には法蔵菩薩の三業二利の行業と転換され、この五念門の真実心が衆生に廻施されて、一心として成就するものと解され

た。つまり天親の五念門提示は親鸞に於いて自己の五念不可能なる存在を痛感せしめるに至り、その反五念なる自己が既に救いの中にあるという領きを明らかにし、自己の内に帰命の一念を發起せしむるために、永劫の五念門行を法蔵菩薩が修せられたと転換されている。ここに如来が単に果位の如来に止どまるのではなく因位の法蔵菩薩へと従果降因せられた意義があるのであり、法蔵菩薩の修行は「一切群生海」の発見に始まり、それらを救済せんとする大慈悲心の発現がその内実である。故に善導に於ける機の深信を親鸞は更に究極にまで深化させたと解せられる。つまり善導が「自身は現にこれ罪悪生死の凡夫」と領いた自覚は、親鸞には「一切群生海」と無限なる広がりをも以て示されてある。自己自身の罪障の自覚すら衆生に於いては不可能であるのに、「群生海」と全人の自覚・悲歎として示されたのはその罪障の自覚内容(偽性)が自己(自我)の意識の眼から、その意識の深層に把えられる存在の把握としての法蔵菩薩の仏眼への転換によるものである。つまりここで自己批判の主体の転換がなされているのである。

名号不思議の海水は 逆謗の死骸もとどまらず 衆悪の万川帰しぬければ 功德のうしおに一味なり(『正像末和讃』)

「逆謗の死骸」とは懺悔不可能な無根存在である。しかしその死骸を「名号不思議の海水」は包摂的に無根の存在として

この穢土に於いて無上大涅槃の功德を源泉する勅命である。「偽」の自覚は、如来に包摂せられていることを自己と関係づける唯一の接点である。「偽」なる汚染が唯一の清浄との接点となるのは「真実誠種」の如来の因位、つまりは法蔵因位の欲生我国の名告りである。如来と絶対にして接点を持ち得ないという「偽」なる自覚は、「若く不生者不取正覚」の兆載永劫の修行を以て願心する法蔵の慈悲心の活動態の自覚自証であり、この自覚自証こそこの末法穢土において願心が我が主体となる信心仏性の芽生えである。「至信心樂」、つまり偽なる自覚のない自我に「欲生我国」の叫びが、

諸有の群生を招喚したもう勅命なり。

と釈されるが如き活動の根源的命法である。「群生海」に常没常流転する逆謗の死骸を回向法の勅命は、その「偽」なる接点に於いて「即得往生不退転」の新しき指標を示し、自我の心中に無上大涅槃を成就して来るのである。

そこで仏弟子の自覚概念であるが、元來仏弟子とは形式上持戒堅固を規定されている。それに対して親鸞は『末法灯明記』を引用して「無戒名字の比丘」の語でその内容を確かめようとしている。つまり親鸞に於いては「仏弟子」の資格を持戒に置いていない。むしろ持戒は外道化する危険性を多大に孕んでおり、逆に形式的持戒により「内心外道を帰敬」する可能性をもそこに潜んでいるからである。故に「無戒名字

の比丘」という領きは、「必ず大涅槃を超証すべき」という一点にその確認を置き、持戒にその僧俗の基準を定める仏弟子ではなく、むしろ罪惡深重な持戒不可能な、或は持戒にその価値すら見だし得ない自覚を持った人間存在こそ真の意味での「仏弟子」と確認していったのである。即ち「偽」なるが故に「仏弟子」と見定めているのである。

以上、親鸞の「仏弟子」観を見るに、『末法灯明記』・後序の記述等を相応させ、当時の仏教界・宗教界全体にまで及んでその現実的様相を、法然伝統の他力念仏の実践を内面的に深化させた体験的味道の場合より峻烈な批判を施し、末法時に於ける真なる仏教徒の現実が、僧俗を問わず如何にあるべきかを明確に結論づけようとした点にその意義が見出されてくる。そこで明らかにされる「真まこと」便同弥勒としての金剛心の行人たる真仏教徒の現実が、師法然の他力念仏義の体得者としての精神を伝承し、「誠まこと」自我欲中心のな場を法蔵菩薩の名告りによる無我的平等の「為」なる自覚の場へと自然にして転換すべき基礎精神が与えられる存在であると見なされるのだが、この真なる「仏弟子」の語の頭さんとする所であらう。

△キーワード▽ 仏弟子

（龍谷大学大学院）